

| | |
|-------------|----------|
| 群 教 七 | E03 - 03 |
| | 平21.241集 |

教師と児童・保護者との 信頼関係を高める方策に関する研究

— 児童のよい姿の見取りと児童・保護者への伝達を通して —

長期研修員 高橋 康則

《研究の概要》

本研究では、小学校において教師が児童・保護者との信頼関係に基づいた学級経営を実現するための方策を探った。児童との信頼を高める方策として、児童のよい姿を観点を設定して見取り、記録すると同時に児童を賞賛した。また保護者との信頼を高める方策として児童のよい姿についてコメントを作成し、保護者に渡した。賞賛やコメントを介した児童と保護者との対話が家庭でも生まれ、児童や保護者の肯定的・協力的な意識が高まった。

キーワード 【小学校 学級経営 見取り 保護者連携】

I 主題設定の理由

小学校における、よりよい学級経営は、教師と児童・保護者との信頼関係の上に成り立つ。この信頼関係をつくるには、児童と保護者が教師に対して肯定的・協力的な意識をもつことが重要である。

そのためには、教師が学級全体に対する学習指導や生徒指導を充実させるだけでなく、児童一人一人に対する学習指導や生徒指導を充実させることが重要である。その方法として、児童個々の学校でのよい姿を児童本人やその保護者に個別に伝えることが効果的であると考え。児童は自分が教師に認められたいと思いながら学校生活を送っている。保護者は我が子が教師からどのように認められているかが気になっている。もし、児童個々のよい姿が一人一人の児童や保護者にたくさん伝えられれば、児童も保護者もそれぞれに教師に対して肯定的な意識をもつようになるであろう。さらに伝えられた児童のよさを話題として家庭内での対話が行われれば、保護者と児童がさらに肯定的・協力的な意識を持ち、結果として教師と児童・保護者との信頼関係が高められるであろう。

児童や保護者により姿を伝えていくために、教師は常に児童のよい姿を見取る必要がある。だが教師は児童のよい姿を見逃してしまうことも少なくない。それは、児童にどのような姿が見られればよいのかという観点が、教師の意識の中で曖昧であるためだと思われる。また、実際に児童のよ

い姿を目にしても、多忙な日常の中でそれらを児童本人に伝えたり、教師が記憶したり記録したりすることが難しい。しかも個別の児童のよい姿を保護者に伝える機会も少なく、教師がそれを保護者に伝える機会が通知表のみであったり、児童のよい姿を伝える機会よりも児童の問題行動について連絡する機会のほうが多くなってしまったりといった現状がある。また、保護者との関係が疎遠になってしまうことで、教師に対するクレームも多くなってしまいうおそれもある。

こうした現状や課題の解決のためには、教師が児童個々のよい姿を常に具体的な観点をもちながら確実に見取り、効果的に記録し、それを計画的に児童に伝えたり保護者に伝えたりしていくシステムの構築が必要であると考え。それにより、直接賞賛された児童の意識が前向きになったり、保護者が我が子のよい姿や教師の温かい見方を知り、教師に肯定的な意識をもったりする。さらに家庭での対話から、保護者と児童が教師に対する肯定的・協力的な意識をもつことが期待され、信頼関係が高められると考え、本主題を設定した。

II 研究のねらい

小学校学級経営において、児童のよい姿について具体的観点を設定して見取り、見取ったよい姿を効果的に記録・集計し、一人一人の児童や保護者に計画的に伝えていくことで、児童や保護者の教師に対する肯定的・協力的な意識が高められ、

教師と児童・保護者との信頼関係づくりに役立つことを明らかにする。

Ⅲ 研究の見通し

1 児童のよい姿を見取る際に、あらかじめ見取る観点を具体的に設定しておくことで、その観点到に照らして、確実に児童のよい姿を見取ったり、児童を賞賛したりできるであろう。

2 見取った児童のよい姿を記録する際に、工夫した記録シートやコンピュータソフトを作成・活用することで、児童のよい姿を確実に効果的に記録・集計できるようになるであろう。

3 児童のよい姿を見取り、記録・集計し、それをもとに児童を賞賛したり、コメントを作成して保護者に伝えたりすることで、児童が学校生活に対する前向きな意識をもったり、教師に対する児童・保護者の肯定的・協力的な意識がかたちづくられたりして、教師と児童・保護者との信頼関係が高められるであろう。

Ⅳ 研究の内容

1 基本的な考え方

小学校学級経営において教師が児童・保護者との信頼関係を高めるために、まず教師が観点を決めて児童個々のよい姿を見取る必要がある。児童のよい姿とは、日常の学校生活に見られる児童の望ましい態度や行動である。この児童のよい姿を、学校生活の場面ごとに指導要録の行動記録の評価項目に沿って考え、観点として設定する。次に、観点到に照らして見取った児童個々のよい姿を、観点を記入した記録シートやコンピュータソフトに記録・保存・集計をする。その際、教師の負担を軽減するために工夫して、文章記述をしなくて済む記録シートや、マウスのクリック操作で記録・集計ができるコンピュータソフトなどを作成する。児童のよい姿を記録すると同時に、そのよい姿について児童を賞賛する。これにより、児童に具体的な行動を賞賛されることによる前向きな意識が芽生えるであろう。また一定期間ごとに、児童に見られたよい姿の集計を活用してコメントを作成し、保護者個々に定期的に渡し、児童のよい姿を伝える。これにより、ふだんは連絡しづら

児童のよい姿が計画的に保護者に伝えられ、保護者と教師とのよい情報伝達のかたちができるであろう。さらに保護者と児童との対話や関係が深められ、児童と保護者の教師に対する肯定的・協力的な意識づくりができると思われる。

2 具体的な研究内容 (図1)

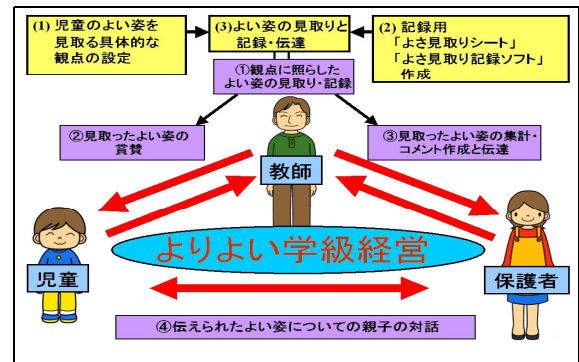


図1 研究構想図

(1) 児童のよい姿を見取る具体的な観点的設定

学校生活の場面ごとに、小学校児童指導要録の行動の記録の評価項目に対応させながら、それぞれについて児童のよい姿を考え、見取りの観点として作成する。具体的には日常の学校生活を網羅するように、授業、係・当番等、休み時間等の3場面に分ける。場面ごとに、指導要録行動の評価10項目に照らして、具体的な児童のよい姿を、「見取りの観点」として合計30個設定する。

(2) 記録用「よさ見取りシート」「よさ見取り記録ソフト」作成

(1)で設定した具体的な観点が児童に見られた際に効率的・効果的に記録ができるよう、「よさ見取りシート」と名付けた記録用紙を作成、活用する。「よさ見取りシート」は授業、係・当番等、休み時間等の場面ごとに合計3枚で構成し、児童名簿に見取りの観点を記入したものとする。

また、表計算ソフトを用いて記録・保存し、児童のよさが集計される「よさ見取り記録ソフト」と名付けたソフトを作成する。このソフトは、入力作業を簡略化する方法がとれるように作成する。具体的にはマウスのクリック操作で入力できたり、自動で観点や項目別の集計一覧が出力できたりするように作成する。

(3) よい姿の見取りと記録・伝達

① 観点到に照らしたよい姿の見取り・記録

具体的な児童のよい姿として作成した見取りの観点到に照らして、その姿が児童に見られた際に、

その回数を「よさ見取りシート」に「正」の字で記録していく。

② 見取ったよい姿の賞賛

「よさ見取りシート」に記録すると同時に、児童本人にそのよい姿について話し、賞賛する。またそれを児童本人から保護者へと話すようにすすめる。これにより、児童に学校生活に対する前向きな意識がかたちづけられたり、まわりの児童に、同じような行動を目指そうとする意識ができたりすることをねらう。

③ 見取ったよい姿の集計・コメント作成と伝達

表計算ソフトに工夫を加えて作成した「よさ見取り記録ソフト」に、「よさ見取りシート」の記録を入力し、自動で集計を行う。2週間から1か

月程度の一定期間ごとに、集計した児童個々のよい姿をもとに、教師が保護者向けに児童個々のよい姿についてのコメントを作成する。作成したコメントを児童個々に渡しながらかつ賞賛すると共に、保護者に読んでもらう。これにより、我が子の学校でのよい姿を知ること、保護者の教師に対する意識を肯定的なものにすることをねらう。

④ 伝えられたよい姿についての親子の対話

コメントを渡すときに、それを話題として親子で対話することを、児童に話してすすめたり、保護者に学級通信や連絡帳を通してすすめたりする。児童のよい姿を話題とした対話により、親子間で学校生活や教師の見方に対して肯定的・協力的なとらえをするようになることをねらう。

V 研究計画

1 実践計画

| 実践項目 | 実践内容 | 実践時期 |
|---------------------------------|--|-----------------------------|
| (1) 児童のよい姿を見取る具体的な観点の設定 | ・教職員アンケート、保護者アンケートによる見取りや記録、伝達の現状分析 ・自己の経験、通知表文例をもとにした見取りの観点の作成 ・協力学級（6学年）における試行と観定の修正 | 6月～7月 |
| (2) 記録用「よさ見取りシート」「よさ見取り記録ソフト」作成 | ・児童のよい姿を記録するための「よさ見取りシート」作成 ・よい姿の回数を集計するためのコンピュータソフト「よさ見取り記録ソフト」作成 | 8月～9月 |
| (3) よい姿の見取りと記録・伝達 | 実施1（研修員本人による見取りと記録・伝達） 実施校：〇〇市立〇〇小学校 実施学級：6学年1学級 実施者：研修員 高橋康則 実施内容：・観定に照らしたよい姿の見取りと賞賛及び記録 ・見取ったよい姿の集計、コメント作成と伝達 | 9月29日～ 10月9日 (9日間) |
| | 実施2（研究協力者による見取りと記録・伝達） 実施校：〇〇市立〇〇小学校 実施学級：2・4・5学年各1学級ずつ 実施者：研究協力者（各学級担任） 実施内容：・観定に照らしたよい姿の見取りと賞賛及び記録 ・見取ったよい姿の集計、コメント作成と伝達 | 10月26日～ 11月13日 (13日間) |

2 検証計画

| 検証方法 | 検証の視点 | 検証時期 |
|----------------------|---|--------------------------|
| ①児童へのアンケート調査 | よい姿を賞賛されたり、よい姿を見取ったコメントを読んだり、保護者との対話をしたりすることで、前向きな意識ができるか。 | 研修員本人による実施後及び研究協力者による実施後 |
| ②保護者へのアンケート調査 | よい姿を見取ったコメントを読むことで、教師に対して肯定的な意識をもったり、子どもと対話ができたりするか。 | |
| ③研究協力者への聞き取りとアンケート調査 | よい姿の見取りと記録、コメントの作成と伝達によって、児童や保護者に与えるよい影響と、作業の負担度とのバランスはどうか。 | による実施後 |

VI 研究の結果と考察

1 児童のよい姿を見取る具体的な観点の設定

(1) 教職員・保護者アンケート結果と実態分析

① 教師による児童の見取りと記録について

教師が児童のよい姿を見取る際の現状を把握するために、所属校職員にアンケート調査を行った(図2)。特に「授業中のよい姿」や「運動面のよい姿」について、ほとんどの教師が「見取りや

すい」と感じている。これに対して、「休み時間のよい姿」や「自然を大切にしている姿」、「工夫して生活している姿」について見取りづらいつと感じるなど、見取りの場面や項目によって見取りやすさに大きな差があることが分かる。教師が児童と一緒にいない時間に、具体的にどのような姿が表れれば「よい姿」であると判断できるのかを見取れるように考える必要があると言える。

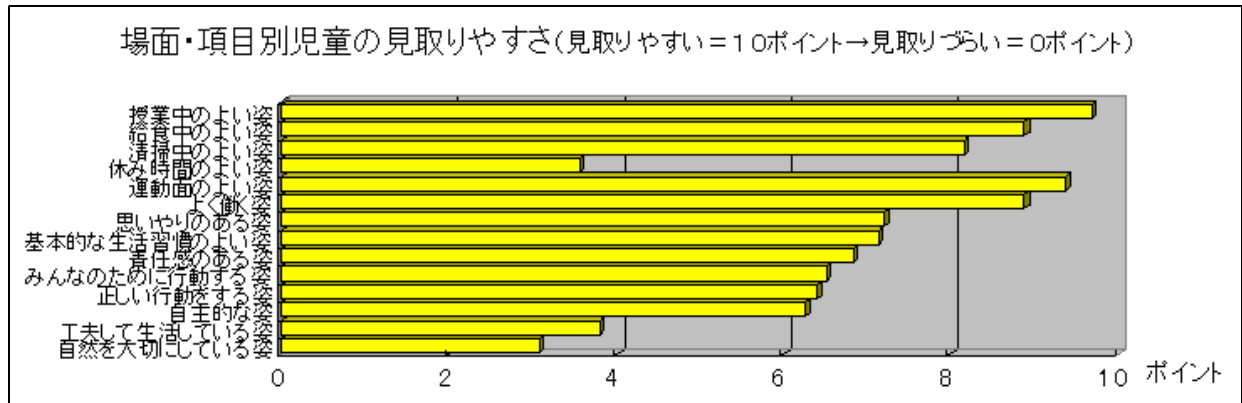


図2 職員事前アンケート結果①

一年間にどの程度、見取った児童の姿について記録しているかについての調査では、一人の児童につき4~5回以上という割合は20%に満たず、2~3回程度という回答が多い(図3)。つまり児童の行動についての記録は1学期に1回程度ということになる。教師は見取った児童の姿を記録するよりも記憶にとどめるだけが多いと言える。そのため児童のよい姿を賞賛したり保護者に伝えたりする回数は多くないと予想される。

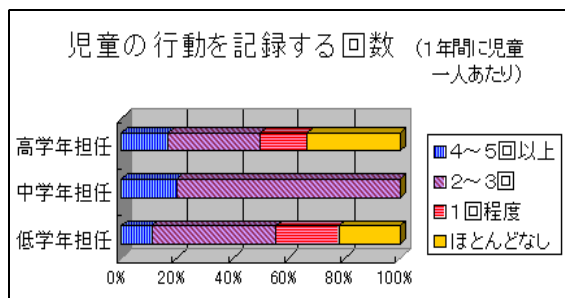


図3 職員事前アンケート結果②

② 教師から保護者への連絡について

児童に関する家庭への情報伝達の現状と課題を把握するために、所属校の保護者を対象にアンケート調査を実施した。

結果(図4)をみると、低学年は担任から連絡をもらうことが多いが、その中身はうれしい内容

の連絡よりも残念な内容の連絡のほうが多い。また、学年がすすむにつれ、担任からの残念な内容の連絡は減っていくが、同時に連絡自体をもらう機会も大きく減っていくことが分かる。

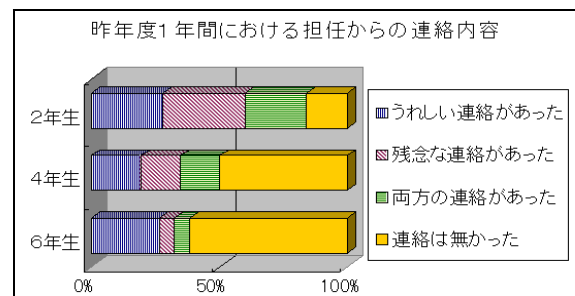


図4 保護者事前アンケート結果

また、保護者に「どのような内容の連絡が欲しいか」と質問した。特に4年生の保護者に顕著だったのは、残念な内容の連絡をもらった保護者が、我が子のよい面や活躍の姿についての連絡を欲しがっているという傾向にあることも分かった。

全体的には、保護者は担任からうれしい連絡を多くはもらっていないことが分かる。このことを担任の立場から考えると、多忙な勤務や保護者と接する機会の少なさの中で児童のよい姿についての連絡がしづらくなっているという現状がうかがえる。

(2) 見取りの観点の作成

児童の姿には見取りやすい場面と見取りづらい場面がある。また、漠然と児童を見取ろうとしたのでは児童のよい姿を見落としがちである。そこで、どのような姿が見られればよいのかを予め教師が準備しておくと考え、児童を見取るための具体的な児童の姿の観点を作成した。

① 児童のよい姿を見取る場面と項目

児童のよい姿を見取る場面は、学校生活の全ての場面とする。この全場面を漠然と見ることをないように、三つに場面分けを行った。具体的には、授業、係・当番等、休み時間等の3場面に分けた。休み時間等には登下校時や校外活動なども入る。児童を見取る場面毎に、指導要録の10の評価項目（基本的な生活習慣、健康・体力の向上、自主・自律、責任感、創意工夫、思いやり・協力、生命尊重・自然愛護、勤労・奉仕、公正・公平、公共心・公德心）に合わせて、見取りの観点を30個作成することにした。

② 児童のよい姿を見取る観点の作成

教師が児童を見取るための観点を作成する際には、自分のこれまでの経験や、担任からどのような連絡をもらえると保護者としてうれしいかのアンケート結果を参考にしたり、所属校の通知表や通知表の文例を参考にしたりしながら具体的な児童の姿を設定した。

見取りの観点は最初、高学年児童を対象として

作成したが、低学年と高学年では児童の発達段階が全く違うので、見られるであろう児童の姿や求めるべき児童のよい姿が大きく違う。そこで、低学年用、中学年用の見取りの観点も追加作成した。例えば「創意工夫」項目で、高学年の「先生が話したことや、自分で重要だと思ったことをノートに記入している」というよい姿を、低学年では「ノートなどへの記入が上手にできている」、中学年では「ノートなどへの記入が見やすいように工夫されている」というように、より自主的な姿を求めるように段階的に作成した。また「基本的な生活習慣」について、低学年の「あいさつを元気よくしている」、中学年の「あいさつや返事を自分からすすんでしている」、高学年の「自分からあいさつをしたり、お礼や謝罪の言葉が言えたりしている」というように、自主性に加えて見取りの姿の内容を増やすように作成したものもある。

③ 作成した観点の吟味と試行

一つ一つの観点を、KJ法を用いて児童に期待する姿ごとに分類して確認することで、学校生活における児童の姿をバランスよく見取ることができると吟味した。また、作成した見取りの観点が指導要録の項目ごとのねらいに合致しているか、実際に見られる児童の姿であるかどうか、観点の重複はないかなどの視点から見取りを試行し、修正を加えた。こうして30個の見取りの観点を設定した（表1）。

表1 最初に設定した具体的な見取りの観点（高学年用）

| 項目\場面 | 『見取りの観点』 | | |
|-----------|---------------------------------------|--|---|
| | 授業中 | 係・当番等 | 休み時間等 |
| 基本的な生活習慣 | 視線を集中させ、姿勢正しく話を聞いている。 | 道具の使い方や身支度・手洗などができる。 | 自分から明るい声で朝のあいさつや帰りのあいさつをしている。 |
| 健康・体力の向上 | 体育でしっかりけんめい体を動かしている。 | 好き嫌なく、栄養のバランスよく食事をしている。 | 体を使った遊びやいろいろな運動をすすんで取り組んでいる。 |
| 自主・自律 | 先生が話したことや、自分で重要だと思ったことをノートに記入している。 | 友達の影響されず、作業を黙々と取り組んでいる。 | 時間を有効に使って自分の力を伸ばそうとしている。 |
| 責任感 | 学習の準備や課題の提出がきちんとできている。 | 自分の分担当を最後まで確実にやっている。 | 係や委員会、日直の仕事を忘れずにやっている。 |
| 創意工夫 | すすんで意見を発表している。 | 作業をやりやすくするために、仕事のやり方や分担当を工夫している。 | 仕事や遊びに工夫を加えながらやっている。 |
| 思いやり・協力 | 班で話し合ったり活動したりする際、上手に取りまとめたり協力したりしている。 | 自分の分担当終わった後、友達の仕事を手伝っている。 | 相手によって、態度や言葉遣いを変えることなく声をかけたり、援助したりしている。 |
| 生命尊重・自然愛護 | 自然や動植物を愛護しようとする意識が、作文や発表の中に感じられる。 | 食べ物感謝の気持ちをもっていただきますやごちそうさまのあいさつができている。 | 動物や植物を大切に考えている行動が見られたり、言葉が聞かれたりしている。 |
| 勤労・奉仕 | 学習や作業の片付けや掃除の役が決まっていなくてもすすんで取り組んでいる。 | 自分の分担当以外の仕事をすすんで引き受けている。 | 手洗いや仕事の頼みご返志し、積極的に取り組む。 |
| 公正・公平 | 友達を区別しないで意見を聞いたり、区別しないで班を組んだりできる。 | 友達によって差をつけず、配膳をしたり仕事を協力できたりしている。 | 友達の分が隔てなく話したり、共に活動することができている。 |
| 公共心・公德心 | 順番を守ったり、譲り合ったりしながら学習用具を上手に使っている。 | 決められたこと以外の仕事を考えてやっている。 | 学校のきまりや時間を守って行動している。 |

注：白抜きは、後に変更のなかった見取りの観点

2 記録用「よさ見取りシート」・「よさ見取り記録ソフト」作成と活用

(1) 「よさ見取りシート」の作成

見取った児童のよい姿を記憶しておくことは非常に難しい。また、多忙な中で全て文章で記録していくことは教師にとって大きな負担である。

そこで、見取りの3場面ごとに1枚ずつの児童名簿を用意し、そこに見取りの観点を記入しておき、観点に照らして合致した姿が児童に見られた際に、「正」の字でその回数を記録していくことを考えた。そのための記録用紙「よさ見取りシート」を授業中用、係・当番等用、休み時間等用の3枚に分けて作成した(図5)。

図5 「よさ見取りシート(授業中用)」

(2) 「よさ見取りシート」への記録

3枚の「よさ見取りシート」を、クリップボードに挟んで常に手元においておいた。児童によい姿が見られた際、すぐに「正」の字でその回数を記録した(図6)。児童の姿を文章で記入するよりも、効率的に記録ができた。観点として準備していない児童のよい姿も見られるため、備考欄に文章による記入も行った。また、各場面ごとに1枚ずつのシートに記入していったことは、観点ごとの見取りの状況が分かりやすく、普段からよく見取れていない観点をより注意深く見取ろうとするなどの工夫をするために役立った。

図6 記録した「よさ見取りシート」

(3) 「よさ見取り記録ソフト」の作成

コンピュータを用いて、「よさ見取りシート」の記録を入力すると自動で集計でき、一覧表に印刷できるような「よさ見取り記録ソフト」と名付けたソフトを作成した。「よさ見取り記録ソフト」では、最初に学級名・児童名・見取りの30観点などの基本情報を入力し、各学級で使用できるように準備をする。その際「見取りの観点表(30観点)」は、教師の意図や児童の実態によって修正・変更が行えるようにした。

次に、一定期間記入された「よさ見取りシート」のデータを「よさ見取り記録ソフト」に転記入力する。入力にはマウスのクリック操作のみで簡単に行うことができるようにした。入力後、自動的に全30観点の記録が集計される。また同時に小学校児童指導要録の10項目別集計を月別・学期別・年間で行える。これにより、児童の指導要録項目に照らした傾向の分析もできる。

この「よさ見取り記録ソフト」を使うことにより、児童のよい姿が明らかになったり、児童個々の特徴が分かりやすくなったりする。

(4) 「よさ見取り記録ソフト」への入力・集計

記入済みの「よさ見取りシート」のデータを「よさ見取り記録ソフト」に転記入力していった。マウスのクリック操作のみで数値を入力できるため、期間を数回に分けての入力をする事ができた。また、集計が自動で行えるようにしたことで、コンピュータ操作の苦手な教師にも活用してもらえたと考えた。入力後、1枚の用紙に学級全児童の30観点別のよい姿が何回見られたかが印刷できるため、記録した全児童の回数が一目で分かった(図7)。同時に小学校児童指導要録の10項目別に分類した傾向も出力されるため、児童の行動傾向をみたり、後に諸帳簿(指導要録など)に活用したりできる資料も作成することができた。

図7 「よさ見取り記録ソフト」集計画面

3 よい姿の見取りと伝達

(1) 研修員本人による見取りと記録・伝達 (図8)

所属校6学年の1学級に依頼をして、9日間、研修員本人が観察者の立場で児童のよい姿を見取った。「よさ見取りシート」に記入しながら、同時にそのよい姿を賞賛する実践を行った。また、9日間の記録を「よさ見取り記録ソフト」に入力・集計した。それをもとにコメントを作成して個々に渡し、その後、保護者にも読んでもらった。

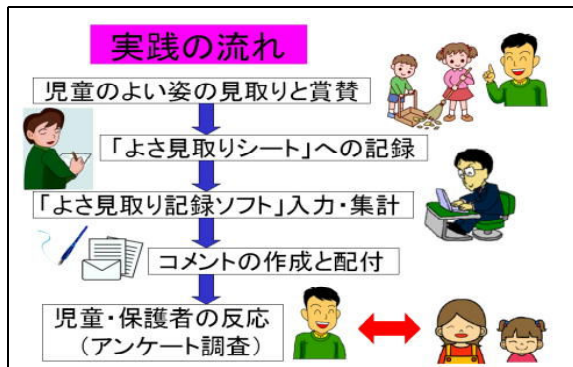


図8 実践の流れ

① 児童のよい姿の見取りと賞賛

研修員本人が観察者となり、授業や生活場면을参観しながら、児童のよい姿を見取った。観察者の立場であったため、常時、見取りの観点に照らして児童の姿を見取ることができた。特に、見取りの観点を事前に準備しておいたことで、児童を見取る際の規準が明確になり、児童のよい姿を見落とすことなく見取ることができたと考える。また、児童のよい姿が見られた際に、児童本人を賞賛していったところ、9日間という短期間の実践のなかでも児童が前向きな意識をもつようになる様子が感じられるなど、変容が見られた。

例えば児童A (男子) は、友達との接し方が上手でなく、個人行動を好み、学級の中で孤立しがちな雰囲気をもつ児童であった。そのため友達から児童Aに対しての言葉かけは温かいものではない様子が見られていた。ただし、この児童Aには、落ちていた床のごみに気付いてほうきで掃き取ったり、よごれている黒板を気にしてきれいに拭いたりといった「勤労・奉仕」の項目に照らしてよい姿が見られた。

そこで、児童Aの行動に対して、「いつもいろいろな仕事に自分から気が付いてやってくれるので、学級のためになり、助かっている」とほめる

ことを何度も行った。同時に、学級全体に対して、児童Aがいつもすすんでみんなのための仕事をしてきていることを紹介した。

その後児童Aは、図工で使った画板の乱れに気付いて、そろえながら積み重ねなおしたり、図書室の本の乱れに気付いて整理したりと、みんなのための仕事をする姿が見取れる機会がさらに増えていった。また、友達と共に班を組んで話し合う授業の際に、明るい表情ですすんで参加する姿も見られるようになり、友達との接し方も変わりつつあるように感じた。実践後の児童Aの感想には、「仕事はどんどんやっていきたいなあと思いました」との記述があった。

児童B (女子) は生活習慣がきちんとしているが、行動が控え目で消極的な性格のようであった。

児童Bの見取りでは、そうじのやり方が丁寧で、いつも黙々と取り組んでいる様子が見られたので、「そうじが上手にでき、見本になっている」と賞賛した。学級全体にも、児童Bがそうじをとでも上手に行えていることを紹介した。

その後も児童Bはそうじに対する丁寧な取組を続けていた。加えて、児童Bの行動を学級全体に紹介したことから、ほかの児童のなかに、そうじに対する取組が好転した者が見られるようになった。児童Bの感想には、「そうじのことをほめられて、自分ではふつうにやっていたけれど、先生から見ればいっしょうけんめいやっているように見えて、うれしかったので、そうじはもっとがんばってみようと思いました」と記されていた。

ほかの多くの児童にも、よい姿を見取るたびに児童本人を賞賛したり学級全体に紹介を行ったりした。児童に書いてもらった感想には以下(表2)のように意識の変容が感じられるものが多くあった。

表2 ほめられた児童の感想(アンケートより)

- 人がやりたがらないような仕事までしてくれたと言われて、これから続けていこうと思った。
- 人の話を姿勢正しく聞いていると言われてうれしかった。自分ではあまり意識していなかったが、これからは姿勢正しく聞くようにしたい。
- 「係ではないのに用意してくれたの」と言われたので、これからは係以外の仕事もしていきたい。
- 「ノートのとり方が上手だね」と言われて、もっとノートのとり方を工夫しようと思った。
- 友達があいさつについてほめられていたので、自分も朝、あいさつをしようと思った。
- 先生にほめられて、「あ、自分はよいことをしているんだ」と自信をもつことができた。

② コメントの作成と配付

30観点別のよい姿の集計をもとに学級一人一人の児童に対するコメントを作成した。

例えば児童C（女子）には、男女の分け隔てなく、相手が忘れ物をしたときには貸してあげたり、授業の中で積極的に教え合いや相談をしたりしている姿が見られた。そのため児童Cの集計では「思いやり・協力」項目の数値が特に高く、これをもとに「困っている友達に気を配ったり声をかけて援助したりと、友達との上手な接し方ができていました」とのコメントを作成した（図9）。

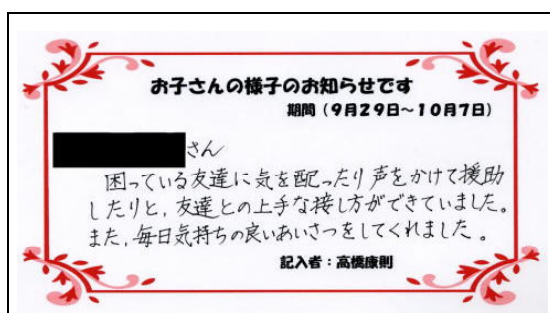


図9 児童Cへのコメント

児童D（男子）はいつも教室内の環境に気を配ったり、だれもやりたがらないような仕事や役目を引き受けてくれたりすることが多く、ごみが落ちていれば拾ったり、ボールが片付いていなければ片付けたりといった姿が見られた。児童Dの集計では「勤労・奉仕」項目の数値が特に高く、これをもとに「だれもやりたがらないそうじや片付けなどにもすすんで取り組んでくれました」とのコメントを作成した（図10）。

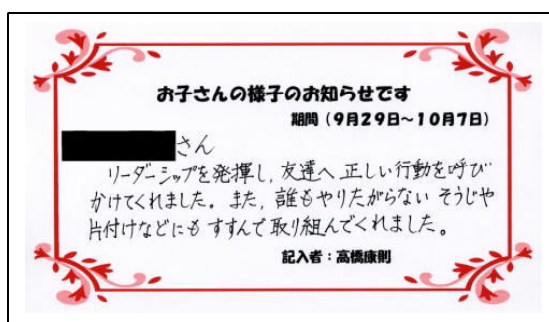


図10 児童Dへのコメント

コメント作成は多くの時間を必要とし、精神的負担も大きな作業であるが、見取りの観点を参考にしたり、「よさ見取り記録ソフト」の集計を見たりすることで、何も資料が無い状態でコメントを作成するよりも教師の負担が少なかった。

③ 児童・保護者の反応

児童個々に渡したコメントを児童本人や保護者に読んでもらった。

児童の感想（表3）から、コメントを読んだ児童が喜んだり、前向きな意識をもったりしたことがうかがえた。特に、児童に普段見られる「よい姿」を、あらためて教師に認められることは、児童が自分の生活を見直したり、児童の自尊感情を高めたりするのに効果的であることが分かった。

表3 コメントを読んだ児童の感想

- 空いた時間にはいつも読書をしているが、時間を上手に使っていると書いてあった。何気なくやっていることがほめられて、驚いたけれどうれしかった。
- 授業に集中していてよいと書いてもらい、うれしかった。これからも続けていきたい。
- 最後まで根気強くやっているという言葉がとても心に残り、うれしかった。
- 書いてもらったことを読んで、細かいところまでみてくれるんだなと思った。
- 整理整頓をほめられて、家でもがんばろうかなと思った。
- 最近、手を挙げるようになったとほめられた。これからもいっぱい手を挙げたい。

保護者の感想（表4）からもコメントに対して好意的な反応が多く寄せられた。特に家庭では見えない学校での様子を知ることができたり、教師が我が子を見てくれているという実感を得たりしたのでありがたいという感想が多く見られた。また、コメントを児童が保護者に読んで聞かせたり、コメントの内容について話し合ったりという様子も寄せられ、コメントを介して、親子で学校生活を話題とした対話ができるという効果もあった。

表4 コメントを読んだ保護者の感想

- 学校での仕事や学習の取組の様子が分かりよかったと思う。様子が分かると安心できてよい。
- 今回の（コメント）がなかったら、娘が努力していることにも気付かなかったと思う。コメントについて詳しく知りたいと思い、娘に聞いたが、うれしそうだった。
- ちゃんと先生が見ていてくれるんだなあ、子どもも喜んでた。
- 学年が上がるにつれて連絡帳などでわざわざ様子をお聞きすることが少なくなるので、今回は思いがけずうれしかった。
- コメントを子どもが読んでくれた。学校生活についての親子の会話が広がった。

コメントを読むことで、児童に、学校生活に前向きな意識が育つきっかけをつくることができたり、保護者に教師に対する肯定的な意識ができたりすることが分かった。同時に、親子のコミュニケーションが、よい姿についての対話となることで、望ましいものとなることが分かった。

(2) 研究協力者による見取りと伝達

研修員の所属校2、4、5学年の各1学級ずつ、合計3学級に依頼をして、13日間、担任に、授業を行いながら同時に児童のよい姿を見取り、「よさ見取りシート」に記入してもらった。その記録を「よさ見取り記録ソフト」に入力・集計をし、それをもとにコメントを作成し、児童個々とその保護者に渡して読んでもらった。この一連の実践について研究協力者の教師から、その効果や改善点について意見をもらった。

① 2年生の研究協力者より

研究協力者の教師は、日常的に児童のよい姿を見取ってほめてあげるところがけているとのことであった。そのため、児童にはふだんから担任の先生にほめられていることによる親近感や信頼関係がつけられている様子を感じ取れた。そのなかで、2年生の研究協力者による実践では、行動面に加えて学習面のよい姿をほめることを加えて行った。その結果、特に低学年では、行動・学習両面から児童のよい姿を見取り、賞賛することが、児童の学校生活のあらゆる面における前向きな意識により大きく影響する様子が見られた。

② 4年生の研究協力者より

研究協力者の教師からは、児童のよい姿を見取る際、「見取りの観点」に書かれた児童の姿の中に抽象的なものがあり、具体的な姿がイメージしづらいという反省が出された。例えば「創意工夫」項目で、「仕事や遊びに工夫を加えながら生活している」という観点では、どのような姿が現れればよいのかが分かりづらい。事前にある程度具体的な姿を想定した「見取りの観点」を設定しておくべきとの意見が出された。

コメント作成については見取りの観点が参考になり、作成しやすかったと評価された。

③ 5年生の研究協力者より

研究協力者の教師は、日常的に児童の行動を記録するようにしているとのことであった。しかし、特によい姿を意識して記録することは少ないため、児童のよい姿に着目し、それを見取って記録する活動は、児童理解や児童の意識の高揚にもつながるよい視点であるとの評価がもられた。保護者からの感想にも、「注意されることの多いうちの子にとっては、とてもうれしかったようで、先生からのメッセージを読み返しながら、『ちゃんと見ていてくれるんだね』と喜んでいました」と寄せられていた。

VII 研究の成果と課題

1 成果

○ 教師が児童の姿を漠然と見ることのないように、具体的な児童の姿として「見取りの観点」を設定し、これを活用して児童を見取ったことは、児童のよい姿を確実に見取るために有効であることが分かった。同時に、児童をバランスよく多面的に見取っているか否か、見取る場面が偏っていないかどうかの確認をするためにも「見取りの観点」は活用できるものであった。

○ 「よさ見取りシート」は、児童のよい姿を文章記述で残すよりもかなり効率的に記録できることが分かった。このシートを、常に手元において児童の様子を記録することができるようになれば、大きな負担なく、ふだんの児童の姿についての資料を得ることができるようになる。

また、「よさ見取り記録ソフト」では、観点到に照らしたよい姿が児童にどの程度の回数見られたかの集計が、児童のよい姿を伝えるためのコメントを作成するのにとても参考になった。また、指導要録の項目別に集計されることは、今後の指導要録記入の際の基礎資料としても使える。

○ よい姿を見取ると同時に児童を賞賛したことは、児童の生活に対する前向きな意識を育てるために役立った様子が、実践した全学年で見られた。賞賛する場面も、よい姿が見られた際に本人を賞賛するのに加えて学級全体に紹介し続けることも、ほかの児童の前向きな意識を形成するためにとっても有効であった。また、教師が児童の課題や問題行動を見付けようとするばかりでなく、常に児童のよい姿を見取ろうとする意識をもち続けることで、児童個々の行動がよく見えたり、児童理解につながったりすることが分かった。

コメント配付によって、それを読んだ児童に喜びと共に、学校生活に対して前向きに努力したりよい姿を継続したりしていこうとする意識が強まった。また、保護者がコメントを読むことで、我が子のよさが認められたことに対する喜びと共に、我が子の学校での様子が伝えられる機会ができることや、それによって親子に望ましいコミュニケーションがうまれることの効果があり、教師と児童・保護者との信頼関係を高めるのに役立つことが明らかとなった。

見取りの実践を通して、「見取りの観点」の中に、見取りづらい児童の姿があることも明らかとなった。例えば「生命尊重・自然愛護」項目で、「食べ物に感謝の気持ちをもって『いただきます』や『ごちそうさま』のあいさつができています」という観点を設定したが、児童の内面を見取るのはとても難しい。そこで、具体的な姿が見取れるように「自然や生命に感謝の気持ちを表しながら生活している」と改め、生物や食べ物を大切にしている具体的な行動を見取

るようにした。また観点到に表した姿が十分なよい姿ではなく、児童が当然達成すべき姿であるものも見受けられた。例えば「公共心・公德心」項目で「学校のきまりや時間を守って行動している」という観点を設定したが、これは当然達成されるべき行動であると考え、「公私に関わらず、物をていねいに扱ったり譲り合ったり使っている」と改め、大変よい姿を求めるという規準で見直した。これらの視点で新たに「見取りの観点」に修正を加えられた（表5）。

表5 修正後の児童のよい姿を見取る具体的な観点(高学年用)

| 項目\場面 | 『見取りの観点』 | | |
|-----------|---------------------------------------|---|---|
| | 授業中 | 係・当番等 | 休み時間等 |
| 基本的な生活習慣 | 学習の持ち物準備や課題の提出がきちんとできている。 | 個人や公共の道具の使い方や整理整頓が上手できている。 | 自分からあいさつをしたり、お礼や謝罪の言葉が言えたりしている。 |
| 健康・体力の向上 | 体育で、最後まで持続して、いっしょけんめい体を使って運動している。 | 好き嫌なく、栄養バランスよく食事している。 | 体を使った遊びやいろいろな運動がすすんで取り組んでいる。 |
| 自主・自律 | 姿勢良く集中して話を聞いたり、すすんで意見を発表したりしている。 | 友達の影響されず、作業が黙々と取り組んでいる。 | 興味あることにすすんで取り組んだり、時間を有効に使ったりして自分の力を伸ばそうとしている。 |
| 責任感 | 学習をいつも最後までていねいにやり遂げている。 | 係や委員会、当番等の仕事を忘れずに、最後まで確実にやっている。 | 仕事や作業を、がまん強く最後までていねいにやっている。 |
| 創意工夫 | 先生が話したことや、自分で重要だと思ったことをノートに記入している。 | 作業をやりやすくしたり充実させたりするため、仕事のやり方や負担を工夫している。 | 生活をしやすいように変えたり、遊びを楽しくしたりといった工夫を加えながら過ごしている。 |
| 思いやり・協力 | 学習が充実するように、友達と援助し合ったり協力し合ったりしている。 | 友達がすすんで協力したり作業を手伝ったりしている。 | 相手によって、態度や言葉遣いを変えることなく声をかけたり、援助したりしている。 |
| 生命尊重・自然愛護 | 自然や動物を愛護しようとする意識が、作文や発表の中に感じられる。 | 自然や生命に感謝の気持ちを表しながら生活している(生き物・植物・食物の扱等)。 | 生き物や植物を大切に考えている行動が現れたり、言葉が聞かれたりしている。 |
| 勤労・奉仕 | 学習や作業の準備や片付け・掃除がすすんで取り組んでいる。 | 自分の分限以外の仕事をすすんで引き受けている。 | たれもやり手のよいような仕事を、自ら引き受けて取り組んでいる。 |
| 公正・公平 | 班や学級全体の友達を区別しないで、意見を聞いたり共々運動したりできている。 | 友達のためと組んでも同じ態度で、仕事を協力できている。 | 友達の分那隔てなく話したり、共々運動したりすることができている。 |
| 公共心・公德心 | 授業を受ける時のきまりやマナーをいつも守っている。 | 決められた仕事のやり方を守って、正しく行っている。 | 公私に関わらず、物をていねいに扱ったり、譲り合ったり使っている。 |

2 課題

- 「見取りの観点」はそれぞれの学級担任の意図や児童の実態によって変わってくるものであると思われる。本研究で作成した「見取りの観点」を参考資料として、使用者が自分の学級の実態に合わせて作りあげていく必要がある。
- 「よさ見取りシート」は、常に手元において記入することに慣れる必要がある。そのため、最初は休み時間や放課後などにまとめて記入することも想定されるが、しだいに児童への指導と並行して記入できるようになることが、効果的な活用のために大切な要素である。
- 本研究では、教師が児童や保護者に対して、児童のよい姿を伝えたり賞賛したりしたが、教師と児童・保護者との信頼関係をより高めるた

めに、児童や保護者から教師への情報伝達を行うことも考えていきたい。例えば賞賛された児童の前向きな意識を児童が文章で残したり、教師のコメントに対して保護者に返事をもらうことなどが考えられる。そのような取組を、児童や保護者に負担なく行えるとよい。

<参考・引用文献>

- ・寺崎 千秋 編
『小学校若手教師の学級経営テキスト』
明治図書(2005)
- ・石田 恒好、羽豆 成二、桑原 利夫 編
『通信簿の文例&言葉かけ集 小学校高学年』
『通信簿の文例&言葉かけ集 小学校低学年』
図書文化(2001)